

## 秀 賞

### 「チャレンジ」

宮城県多賀城市立多賀城中学校

三年 高橋 歩 未

テレビに目を向けると、スポーツを頑張っている私と同じ年くらいの少年がニュースに取り上げられていた。どうやら、大きな大会で優勝したらしい。賞状を持った少年に、インタビュアーは問う。

「将来の夢は何ですか。」

少年は照れくさそうにしながらも、しっかりと前を見据えた目で言った。

「オリンピックで金メダルを取ることです。」

その姿はとてきれきらしていた。将来の夢へと向かって、高みを目指す彼の姿に、私はとても感心した。そして、考えこんでしまう。「じゃあ、私は、どうなんだ。」と。

私には、特技と呼べるものがない。勉強や部活動、習い事など、一生懸命取り組んできた。しかし、その中で一番になったことは一度もない。いつも真ん中。良くても、二番手、三番手。いつしか私は、自分に自信を持ってなくなってしまう。そんな私が、将来の夢を持つことは、簡単ではなかった。「あれをしてみたい。」と思っても、「でもな。私には無理かな。」とネガティブ思考に入り、結局考えることをやめてしまう。私は、そんな自分が嫌いだった。だから、将来の夢を持っている人は、私の目には輝

いて映ったし、羨ましくもあった。そして、少し妬ましくもあったのだ。そして、少し妬ましくもあったのだ。

そんな私を変えたのは、中学校生活でのある三つの出来事だ。その出来事を通して私は、将来に迷い、もがき、悩んでいた自分と別れを告げ、前を向いて一歩を踏み出すことができたのだ。

中学一年生の冬。総合的な学習の時間で、職業調べをした。自分が将来になりたい職業や興味のある職業について調べ、まとめるという学習だ。私は、まだ将来の夢を見つけていないので、興味のある職業についてまとめることにした。実は私には、小学生の頃から興味を持っている職業がある。それは、司書だ。小学生の頃から本が好きだった私は、よく図書館に通っていた。そこで働いていた司書さんに憧れを持っていた私は、いつしか司書の道に興味を持ち始めたのだ。だが、それはあくまでも幻想。ほんやりとした憧れにすぎなかった。今回の学習で司書について調べてみると、様々な情報を得ることができた。すると、私の心の中で、司書の仕事が幻想的なものではなく現実的なものとなり、興味はさらに大きくなったのだ。

中学二年生の秋。興味が大きくなった司書の仕事を、職場体験学習の一環で、大学図書館を訪問し仕事の体験をさせていただいた。実際に「働く」という体験を通して、仕事をする上での厳しさ、楽しさを学ぶことができた。司書の仕事はとて多く、大変なこともあったが、それ以上にやりがいを感じ、自分の将来を見つめ直す良い経験となった。質疑応答の時間、私は司書の方に尋ねた。

「職業人になるために、今、中学生が培っておくべきことは何ですか。」

司書の方は、

「何事にもチャレンジして、世の中のことを吸収し

てほしい。視野を広げてほしい。」と答えてくださった。

中学三年生の春。修学旅行で東京へ行き、出版社を訪問させていただいた。司書という職に縛られず、他の視点からも本と関わってみようと思ったからだ。出版社では、本を出版する上での重要な職業、編集者の仕事について学ばせていただいた。そこでも質疑応答の時間があり、私は大学図書館で尋ねた質問を編集者の方にも尋ねてみた。回答は、「今は何事にも知的好奇心を持ち、貪欲にチャレンジしてほしい。」

とのことだった。「チャレンジ」。その言葉が、私の頭の中でぐるぐると回る。「今まで私、チャレンジしたことがあったかな。」と。

司書の方も、編集者の方も、「チャレンジ」という言葉を口にした。それだけ、チャレンジすること大切なことなのだ。しかし、私はどうだろう。「無理かな。」と、いつかチャレンジすらしていない私は、一体何だろう。三つの出来事を通して、やっと気づくことができたのだ。

今、私は生徒会に所属している。仲間と共に学校の運営、企画にチャレンジすることで、私の視野はみるみる広がっていった。将来の夢との向き合い方も変わった。夢がないことにコンプレックスを抱いていた私だったが、「チャレンジ」して「たくさん」の視点から物事を見つめる」ことを大事にし、自分の可能性を広げようと考えたからだ。そうすればおのずと、自分の進みたい道が見えてくると信じている。だが、これから先、道の途中で悩み、立ち止まってしまうこともあるだろう。そこでずっと立ち止まるのではなく、チャレンジすることで一歩ずつ前進していききたい。